

凍てつく大雪原をはるか
 動乱のちまたをくぐり
 ひたむきに愛し
 誠実に生きた
 一つの魂がよびおこす
 美しき感動の結晶

*永遠の愛をうたう《ララのテーマ》

六部門のアカデミー賞受賞

脚色賞/撮影賞/作曲賞/美術賞/装設賞/衣裳デザイン賞

巨匠デビッド・リーン監督作品

オマト・チャプリフ/ジェラルデン・チャップリン
 ジュリー・クリステイ/アレック・ギネス/他



ドクトル ژیバゴ

METRO GOLDWYN MAYER PRESENTS A CARLO PONTI PRODUCTION
 DAVID LEAN'S FILM
 OF BORIS PASTERNAK'S
 DOCTOR ZHIVAGO

カラー作品

MGM映画 CIC配給

11月14日(土)ロードショー!

特別鑑賞券《¥1,200》
 絶賛発売中!
 (一般¥1,500・学生¥1,300の処)

新宿スカラ座
 (351)3127



〈カラー作品〉

ドクトルジバゴ

DOCTOR ZHIVAGO

監督……………デビッド・リー
 原作……………ボリス・パステルナーク
 脚色……………ロバート・ポルト
 撮影……………フレッド・A・ヤング
 音楽……………モーリス・ジャール
 (サントラ盤 MGMレコード)

★ キャスト ★

ユーリー・ジバゴ……………オマー・シャリフ
 ラーラ……………ジュリー・クリスティン
 トーニャ……………ジェラルディン・チャップリン
 パーシヤ……………トム・コートネイ
 エアンナ……………アレック・ギネス
 アレクサンドロ……………シオバン・マドケナ
 コマロフスキー……………ラルフ・リチャードソン
 若い娘……………ロッド・スタイガム
 アメーリア……………リタ・トゥシンハム
 ………………エイドリアン・コリ

かいつつ

これは、ソ連の詩人で小説家のボリス・パステルナーク(一八九〇—一九六〇)の代表作の映画化である。

この小説は、第一次世界大戦及びそれに続く革命的動乱のロシアを舞台に、破壊と殺りくに明け暮れる人間不在の時代を、最も人間的に生き抜いた若き医師の愛と悲しみの物語りで、一九五八年にノーベル文学賞を与えられることに決定したが、周囲の政治的事情から、パステルナークはこれを辞退しなければならなかった。このパステルナーク事件は、授賞されたが受賞されなかったノーベル賞として、当時世界の話題を呼んだ。この小説は日本でも翻訳され、ベストセラーの一つに数えられた。小説は、ソ連では禁止されたが、いち早くイタリアで出版されると、映画化権が各社によって争われたが、結局、イタリアの世界的映画製作者カルロ・ポンティの手に戻した。

そこでMGMは、カルロ・ポンティを製作者として、映画化に乗り出した。監督には、ちゆうちよなく、デビッド・リーンが選ばれた。彼は「戦場にかける橋」や「アラビアのロレンス」で、非常な、激しい環境の中に、人間性あふれる感動のドラマを描いた世界的巨匠で、「ドクトル・ジバゴ」の監督として、誰の目にも最適任者だった。

小説を読んで深く動かされたリーン監督は、登場人物の多い複雑多岐な小説を、映画的な、すっきりしたストーリーに絞るため、「アラビアのロレンス」・「わが命尽きる」ともなどのロバート・ポルトに脚色を依頼し、絶えず打合せを重ねながら、一年がかりで二八四頁のシナリオを完成した。撮影監督には、「アラビアのロレンス」で一緒に仕事をした名手フレッド・A・ヤングが選ばれた。

この映画では、ロシアの風景が、ストーリーや雰囲気作りには無くてはならない大切な要素だった。そこで、モスクワ、ウラル山地、シベリア

平原などへ、ロケ隊を送ることも検討されたが、実現が不可能だったの

で、他の方法でこれカバリーしなければならなかった。まず、スペインのマドリッド郊外四万平方メートルの土地いっぱい、当時のモスクワの都心部を再現、また、フィンランドのソ連国境に近い地方に、冬季の長期ロケが行われたり、ウラル山地のシーンには、カナダのロッキー山脈地帯や、スペインのピレネー山地が選ばれた。

音楽はモーリス・ジャールで、哀愁の「ラーラのテーマ」をはじめ、美しく心うつつ作曲である。

主な出演者は、主人公ジバゴに扮するのが「うたかたの恋」(夕映え)などのオマー・シャリフで、彼を愛する二人の女性には、遙か群衆を離れて「ナッシュビル」などのジュリー・クリスティと、「悲しみは星影と共に」ある晴れた朝突然に「などのジェラルディン・チャップリンが懸命な演技を競っている。彼らをめぐる、「魚が出てきた日」(将軍たちの夜)などのトム・コートネイ、「危険な旅路」(さらばベルリンの灯)などのアレック・ギネス、「人間の絆」のシオバン・マドケナ、「カーツーム」のラルフ・リチャードソン、「質屋」(夜の大捜査線)などのロッド・スタイガーたちが、豊かな演技力でドラマを盛り上げて行く。

この映画のワイルド・プレミアがニューヨークで開かれた時、AP通信の映画記者は、「ハリウッドは、『風と共に去りぬ』以来忘れられていた映画の感動を、『ドクトル・ジバゴ』により、再びわれわれに与えてくれた」という賛嘆の電報を世界中に打電したが、この感激はやがて世界をおおいつくし、ロンドンでは今もなお記録的なロングランを続けている。また、脚色、撮影、音楽、美術、装置、衣裳デザインの一部門のアカデミー賞を獲得したが、これは一九六五年度における最多受賞である。(二四巻—三時間—五分)

あらすじ

ロシア。十九世紀の終りに近い頃、ユーリー・ジバゴは、八歳で父母を失い、化学者のアレクサンドロ・グロメーコのもとに引きとられ、彼や妻のアンナから実の子のように可愛られて何となく育てられた。青年になったジバゴは、詩人として知られるようになったが、もつと直接社会に役立つ職業をと、医学を勉強していた。この家の娘トーニャは、幼い頃から彼を尊敬していたが、いつか深く愛するようになり、両親も、ゆくゆく二人が結婚してくれればと望んでいた。

グロメーコ家から余り遠くない所に、仕立屋のアメーリア・ギンジャーが住んでいた。娘のラーラは純真で頭が良く、革命に若い情熱を燃やす学生パーシヤ・アンティエーポフに愛されていた。

アメーリアにはビクトル・コマロフスキーという弁護士のパトロンがいたが、ある夜、ラーラが気分の悪い母の代りに彼と食事に外出したことから、秘密の情事が始まった。それと知った母親が、自殺を計ったが、幸いコマロフスキーの友人の医師のおかげで命を取りとめた。この医師についてきた若い見習いがジバゴだった。

その後もラーラは、コマロフスキーの誘惑から逃がれることができなかったが、不潔な情事からわが身を振りほどこうと必死になっていた。そして思い余った彼女は、クリスマス舞踏会の夜、ピストルでコマロフスキーを射った。幸い急所ははずれ、居合わせたジバゴが傷の手当をしてやった。

一九一四年、ロシアは第一次大戦に突入した。これを機に革命運動は活発化した。彼らは敗戦から革命へのコースを信じ、敗戦の組織化に懸命だった。その組織者の中に、ジバゴの異母兄エフグラフとなっていたラーラに再会した。彼は既にトーニャと結婚し、彼女もパーシヤと結婚、女の子があったが、パーシヤの戦死が報せられていた。二人の間は友情から愛情にまで高まって行っていたが、兵の戦線放棄が始まり、内戦がいよいよその激しさを加えるようになって、ラーラは幼い娘のことが心配のあまりグラドフに帰り、ジバゴも家族のいるモスクワに戻った。

革命の手に帰したモスクワには、昔の華かさや優雅さは全くなく、あるものは飢と欠乏だった。ジバゴは、兄エフグラフの計いで、家族と共にウラルのワイルド・キノに出かけた。モスクワからのこの旅は、まるで悪夢のような幾週間であった。途中、ジバゴは、白軍のスパイではないかと疑われ、人々から鬼のように恐れられていた赤軍のストレーリニコフ将軍直ま直まの取調べを受けた。この將軍こそ戦死と信じられていたラーラの夫パーシヤだった。ジバゴは彼の口から、ラーラがワイルド・キノに近いユリヤチンにいることを聞き、彼女を訪ねた。

ラーラとの愛の生活が続いたが、トーニャに二人目の子が生まれると知り、ひそかにラーラに別れを告げた。途中赤色バルチザンの二隊に捕らえられ、彼らと行動を共にしなければならなかった。だが愛する人たちのことが心配のあまりに脱走、病の身に鞭打って死の思いの旅を続けた末ラーラにめぐりあつて、トーニャが夫とラーラとの愛情から身をひき、子供を連れてパリへ去ったことを知った。

二人が荒廃したユリヤチンで楽しい日々を送っている時、思いがけなく弁護士のコマロフスキーが現われて彼らの幸福を突き破った。そして……。